太宰治全集

8

筑摩書房

太宰治全集第八巻

昭和四十二年十一月二日第一刷発行
昭和四十五年六月三十日第六刷発行

著者　太宰治

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二二三

印刷・三晃印刷
製本・鈴木製本

(分類) 0393 (製品) 70008 (出版社) 4604

パンドラの匣　三
津輕通信　一三五
庭　一三六
やんぬる哉　一四二
親といふ二字　一四九
嘘　一五五
雀　一六七
貨幣　一七九
薄明　一八七
苦惱の年鑑　二〇一
十五年間　二一三

未歸還の友に　二三七
チャンス　二五三
たづねびと　二六六
親友交歡　二七七
男女同權　二九九
トカトントン　三一〇
冬の花火　三三九
春の枯葉　三七三
後記　四一五

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

太宰治全集

第八卷

パンドラの匣

幕ひらく

1

君、思ひ違ひしちやいけない。僕は、ちつとも、しよげてはゐないのだ。君からあんな、なぐさめの手紙をもらつて、僕はまごついて、それから何だか恥づかしくて赤面しました。妙に落ちつかない氣持でした。こんな事を言ふと、君は怒るかも知れないけれど、僕は君の手紙を讀んで、「古いな」と思ひました。君、もうすでに新しい幕がひらかれてしまつてゐるのです。しかも、われらの先祖のいちども經驗しなかつた全然あたらしい幕が。

古い氣取りはよさうぢやないか。それはもうたいてい、ウソなのだから。僕は、いま、自分のこの胸の病氣に就いても、ちつとも氣にしてはゐない。病氣の事なんか、忘れてしまつた。病氣の事だけぢやない。何でもみんな忘れてしまつた。僕がこの健康道場にはひつたのは、戰爭がすんで急に命が惜しくなつて、これから丈夫なからだになり、何とかして一つ立身出世、なんて事のためでは勿論ないし、また、早く病氣をなほしてお父さんに安心させたい、お母さんを喜ばせたいなどといふ涙ぐましいやうな殊勝な孝心からでも無かつたのだ。しかし、また、へんなやけくそを起してこんな邊鄙な場所へ來てしまつたといふわけでも無いんだ。ひとの行爲にいちいち說明をつけるのが旣に古い「思想」のあやまりではなからうか。無理な說明は、しばしばウソのこぢつけに終つてゐる事が多い。理論の遊戯はもうたくさんだ。概念のすべてが言ひ盡されて來たぢやないか。僕がこの健康道場にはひつたのには、だから何も理由なんか無いと言ひたい。或る日、或る時、聖靈が

胸に忍び込み、涙が頰を洗ひ流れて、さうしてひとりでずゐぶん泣いて、そのうちに、すつとからだが輕くなり、頭腦が涼しく透明になつた感じで、その時から僕は、ちがふ男になつたのだ。それまで隱してゐたのだが、僕はすぐに、

「喀血した。」

とお母さんに言つて、お父さんは、僕のためにこの山腹の健康道場を選んでくれた。本當にもう、それだけの事だ。或る日、或る時とは、どんな事か。それは君にもおわかりだらう。あの日だよ。あの日の正午だよ。ほとんど奇蹟の、天來の御聲に泣いておわびを申し上げたあの時だよ。

あの日以來、僕は何だか、新造の大きい船にでも乘せられてゐるやうな氣持だ。この船はいつたいどこへ行くのか。それは僕にもわからない。未だ、まるで夢見心地だ。船は、するする岸を離れる。この航路は、世界の誰も經驗した事のない全く新しい處女航路らしい、といふ事だけは、おぼろげながら豫感できるが、しかし、いまのところ、ただ新しい大きな船の出迎へを受けて、天の潮路のまにまに素直に進んでゐるといふ具合なのだ。

しかし、君、誤解してはいけない。僕は決して、絕望の末の虛無みたいなものになつてゐるわけではない。船の出帆は、それはどんな性質の出帆であつても、必ず何かしら幽かな期待を感じさせるものだ。それは大昔から變りのない人間性の一つだ。君はギリシヤ神話のパンドラの匣といふ物語をご存じだらう。あけてはならぬ匣をあけたばかりに、病苦、悲哀、嫉妬、貪慾、猜疑、陰險、飢餓、憎惡など、あらゆる不吉の蟲が這ひ出し、空を覆つてぶんぶん飛び廻り、それ以來、人間は永遠に不幸に悶えなければならなくなつたが、しかし、その匣の隅に、けし粒ほどの小さい光る石が殘つてゐて、その石に幽かに「希望」といふ字が書かれてゐたといふ話。

2

それはもう大昔からきまつてゐるのだ。人間には絶望といふ事はあり得ない。人間は、しばしば希望にあざむかれるが、しかし、また「絶望」といふ觀念にも同樣にあざむかれる事がある。正直に言ふ事にしよう。人間は不幸のどん底につき落され、ころげ廻りながらも、いつかしら一縷の希望の糸を手さぐりで捜し當ててゐるものだ。それはもうパンドラの匣以來、オリムポスの神々に依つても規定せられてゐる事實だ。樂觀論やら悲觀論やら、肩をそびやかして何やら演說して、ことさらに氣勢を示してゐる人たちを岸に殘して、僕たちの新時代の船は、一足おさきにするすると進んで行く。何の澁滯も無いのだ。それはまるで植物の蔓が延びるみたいに、意識を超越した天然の向日性に似てゐる。

本當にもうこれからは、やたらに人を非國民あつかひにして責めつけるやうな氣取つたものの言ひ方などはやめにしませう。この不幸な世の中を、ただいつそう陰鬱にするだけの事だ。他人を責めるひとほど陰で惡い事をしてゐるものではないのか。こんどまた戰爭に負けたからと言つて、大いそぎで一時のがれのごまかしを揑造して、ちよつとうまい事をしようとたくらんでゐる政治家など無ければ幸ひだが、そんな淺墓な言ひつくろひが日本をだめにして來たのだから、これからは本當に、氣をつけてもらひたい。二度とあんな事を繰り返したら世界中の鼻つまみになるかも知れぬ。ホラなんか吹かずに、もつとさつぱりと單純な人になりませう。新造の船は、もう既に海洋にすべり出てゐるのだ。

そりや僕だつて、いままでずゐぶんつらい思ひをして來たのです。君もご存じのとほり、僕は昨年の春、中學校を卒業と同時に高熱を發して肺炎を起し、三箇月も寢込んでそのために高等學

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

校への受驗も出來ず、どうやら起きて歩けるやうになつてからも、微熱が續いて、醫者から肋膜の疑ひがあると言はれて、家でぶらぶら遊んで暮してゐるうちに、ことしの受驗期も過ぎてしまつて、僕はその頃から、上級の學校へ行く氣も無くなり、そんならどうするのか、となると眼の先がまつくらで、家でただ遊んでゐるのもお父さんに申しわけがなく、またお母さんに對しても、ていさいの惡いこと並たいていではなく、君には浪人の經驗が無いからわからないかも知れないが、あれは全くつらい地獄だ。僕はあの頃、ただもうやたらに畑の草むしりばかりやつてゐた。そんな、お百姓の眞似をする事で、わづかにお體裁を取りつくろつてゐた次第なのだ。ご承知のやうに、僕の家の裏には百坪ほどの畑がある。これは、ずつと前から、どうしたわけか僕の名前で登記されてゐるらしいのだ。そのせゐばかりでもないけれども、僕はこの畑の中に一歩足を踏みいれると、周圍の壓迫からちよつとのがれたやうな氣樂さを覺えるのだ。この一、二年、僕はこの畑の主任みたいなものになつてしまつてゐた。草をむしり、また、からだにさはらぬ程度で、土を打ちかへし、トマトに添木を作つてやつたり、まあ、こんな事でも少しは食料增產のお手傳ひにはなるだらうと、その日その日をごまかして生きてゐたのだけれども、けれども、君、どうしてもごまかし切れぬ一塊の黑雲のやうな不安が胸の奧底にこびりついてゐて離れないのだ。こんな事をして暮して、いつたい僕はこれから、どんな身の上になるのだらう。なんの事はない、てもなく廢人ぢやないか。さう思ふと、呆然とする。どうしてよいか、まるで見當も何もつかなくなるのだ。さうして、こんなだらし無い自分の生きてゐるといふ事が、ただ人に迷惑をかけるばかりで、全然無意味だと思ふと、なんとも、つらくてかなはなかつたのだ。君のやうな秀才にはわかるまいが、「自分の生きてゐる事が、人に迷惑をかける。僕は餘計者だ。」といふ意識ほどつらい思ひは世の中に無い。

3

けれども君、僕がこんな甘つたれた古くさい薄のろの惱みを續けてゐるうちにも、世界の風車はクルクルと眼にとまらぬ早さでまはつてゐたのだ。歐洲に於いてはナチスの全滅、東洋に於いては比島決戰についで沖繩決戰、米機の日本內地爆擊、僕には兵隊の作戰の事などほとんど何もわからぬが、しかし、僕には若い敏感なアンテナがある。このアンテナは信賴できる。一國の憂鬱、危機、すぐにこのアンテナは、ぴりりと感ずる。理窟は無いんだ。勘だけなんだ。ことしの初夏の頃から、僕のこの若いアンテナは、嘗つてなかつたほどの大きな海嘯の音を感知し、震へた。けれども僕には何の策も無い。ただ、あわてるばかりだ。僕は滅茶苦茶に畑の仕事に精出した。暑い日射しの下で、うんうん唸りながら重い鍬を振り廻して畑の土を掘りかへし、さうして甘藷の蔓を植ゑつけるのである。なんだつて毎日、あんなに烈しく畑の仕事を續けたのか、僕には今もつてよくわからない。自分のやくざなからだが、うらめしくて、思ひ切りこつぴどく痛めつけてやらうといふ、少しやけくそに似た氣持もあつたやうで、死ね！　死んでしまへ！　死ね！　死んでしまへ！　と鍬を打ちおろす度毎に低く呻くやうに言ひ續けてゐた日もあつた。僕は甘藷の蔓を六百本植ゑた。

「畑の仕事も、もういい加減によすんだね。お前のからだには少し無理だよ。」と夕食の時にお父さんに言はれて、それから三日目の深夜、夢うつつの裡に、こんこんと咳き込んで、そのうちに、ごろごろと、何か、胸の中で鳴るものがある。ああ、いけない、とすぐに氣附いて、はつきり眼が覺めた。喀血の前に、胸がごろごろ鳴るといふ事を僕は、或る本で讀んで知つてゐたのだ。腹這ひになつた途端に、ぐつと來た。口の中に一ぱい、生臭い匂ひのものを含みながら、僕は便所へ小走りに走つた。やはり血だつた。便所にながいこと立つてゐたが、それ以上は血が出なかつた。僕は

忍び足で臺所へ行き、鹽水でうがひをして、それから顏も手も洗つて寢床へ歸つた。咳の出ないやうに息をつめるやうにして靜かに寢てゐて、僕は不思議なくらゐ平氣だつた。こんな夜を、僕はずつと前から待つてゐたのだといふやうな氣さへした。本望、といふ言葉さへ思ひ浮んだ。明日もまた、默つて畑の仕事を續けよう。仕方がないのである。他に生きがひの無い人間なのである。ぶんを知らなければいけない。ああ、本當に僕なんか一日も早く死んでしまつたはうがいいのだ。いまのうちに、うんと自分のからだをこき使つて、さうしてわづかでも食料の增產に役立ち、あとはもうこの世からおさらばして、お國の負擔を輕くしてあげたはうがよい。それが僕のやうな、やくざな病人のせめてもの御奉公の道だ。ああ、早く死にたい。

さうして翌る朝は、いつもより一時間以上も早く起きて、さつさと薄團を疊んで、ごはんも食べずに畑に出てしまつた。さうして滅茶苦茶に畑仕事をした。今から思ふと、まるで地獄の夢のやうだ。僕は勿論、この病氣の事は死ぬまで誰にも告白せずにゐるつもりだつた。誰にも知らせずに、こつそりぐんぐん病氣を惡化させてしまふつもりであつた。こんな氣持をこそ、墮落思想といふのだらうね。僕はその夜、お勝手に忍び込んで、配給の燒酎をお茶碗で一ぱい飲みほしちやつたよ。さうして、深夜、僕はまた喀血をした。ふと眼覺めて、二つ三つ輕く咳をしたら、ぐつと來た。こんどは便所まで走つて行くひまも無かつた。硝子戸をあけて、はだしで庭へ飛び降りて吐いた。ぐいぐいと喉からいくらでも込み上げて來て、眼からも耳からも血が噴き出てゐるやうな感じがした。コップに二杯くらゐも吐いたらうか、血がとまつた。僕は血で汚れた土を棒切で掘り返して、わからないやうにした。とたんに空襲警報である。思へば、あれが日本の、最後の夜間空襲だつたのだ。朦朧とした氣持で、防空壕から這ひ出たら、あの八月十五日の朝が白々と明けてゐた。

でも僕は、その日もやつぱり畑に出たのだ。それを聞いては、流石に君も苦笑するだらう。しかし君、僕にとつては笑ひ事ぢや無かつた。本當にもうそれより以外に僕の執るべき態度は無いやうな氣がしてゐたのだ。どうにも他に仕様が無かつた。さんざ思ひ迷つた揚句の果に、お百姓として死んで行かうと覺悟をきめた筈ではないか。自分の手で耕した畑に、お百姓の姿で倒れて死ぬのは本望だ。えい、何でもかまはぬ早く死にたい。目まひと、惡寒と、ねつとりした冷い汗とで苦しいのを通り越してもう氣が遠くなりさうで、豆畑の茂みの中に仰向に寢ころんだ時、お母さんが呼びに來た。早く手と足を洗つてお父さんの居間にいらつしやいといふ。いつも微笑みながらものを言ふお母さんは、別人のやうに嚴肅な顏つきをしてゐた。

お父さんの居間のラヂオの前に坐らされて、さうして、正午、僕は天來の御聲に泣いて涙が頰を洗ひ流れ、不思議な光がからだに射し込み、まるで違ふ世界に足を踏みいれたやうな、或ひは何だかゆらゆら大きい船にでも乘せられたやうな感じで、ふと氣がついてみるともう、昔の僕ではなかつた。

まさか僕は、死生一如の悟りをひらいたなどと自惚れてはゐないが、しかし、死ぬも生きるも同じ樣なものぢやないか。どつちにしたつて同じ樣につらいんだ。無理に死を急ぐ人には氣取屋が多い。僕のこれまでの苦しさも、自分のおていさいを飾らうとする苦勞にすぎなかつた。古い氣取りはよさうぢやないか。君の手紙の中に「悲痛な決意」などといふ言葉があつたけれども、悲痛なんてのは今の僕には、何だか安芝居の色男役者の表情みたいに思はれる。悲痛どころではあるまい。それはもう既に、ウソの表情だ。船は、するする岸壁から離れたのだ。そして船の出帆には、必ず

何かしらの幽かな希望がある筈だ。僕はもう、しよげてはゐない。胸の病氣も氣にしてゐない。君からあんな、同情の言葉に滿ちた手紙をもらつて、僕は實際まごついた。僕はいまは何も思はず、ただこの船に身をゆだねて行くつもりだ。僕はあの日、すぐにお母さんに打ち明けた。自分でも不思議なくらゐ平靜な態度で打ち明けた。

「僕、ゆうべ喀血しました。その前の晩も、喀血しました。」

何の理由も無かつた。急に命が惜しくなつたといふわけでも無い。ただ、きのふ迄の無理な氣取りが消えただけだ。

お父さんは僕のためにこの「健康道場」を選んでくれた。ご承知のやうに、僕のお父さんは數學の教授だ。數字の計算は上手かも知れないが、お金のお勘定なんてのは一度もした事がないらしい。いつも貧乏なのだから、僕も、ぜいたくな療養生活など望んではいけない。この簡素な「健康道場」は、その點だけでも、まつたく僕に似合つてゐる。僕には、何の不平も無い。僕は、六箇月で全快するさうだ。あれから一度も喀血しない。血痰さへ出ない。病氣の事なんか忘れてしまつた。この「病氣を忘れる」といふ事が、全快の早道だと、ここの場長さんが言つてゐた。少し變つたところのある人だ。何せ、結核療養の病院に、健康道場などといふ名前をつけて、戰爭中の食料不足や藥品不足に對處して、特殊な鬪病法を發明し、たくさんの入院患者を激勵して來た人なのだから。とにかく變つた病院だよ。とても面白い事ばかり、山ほどあるんだけど、まあこの次にゆつくりお話しませう。

僕の事に就いては、本當に何もご心配なさらぬやうに。では、そちらもお大事に。

昭和二十年八月二十五日

健康道場

1

けふはお約束どほり、僕のいまゐるこの健康道場の様子をお知らせしませう。E市からバスに乗つて約一時間、小梅橋といふところで降りて、そこから他のバスに乗りかへるのだが、でも、その小梅橋からはもう道場までいくらも無いんだ。乗りかへのバスを待つてゐるより、歩いたはうが早い。ほんの十丁くらゐのものなのだ。道場へ來る人は、たいていそこからもう歩いてしまふ。つまり、小梅橋から、山々を右手に見ながらアスファルトの縣道を南へ約十丁ほど行くと、山裾に石の小さい門があつて、そこから松並木が山腹までつづき、その松並木の盡きるあたりに、二棟の建物の屋根が見える。それがいま、僕の世話になつてゐる「健康道場」と稱するまことに風變りな結核療養所なのだ。新館と舊館と二棟にわかれてゐる。舊館のはうはそれほどでもないが、新館はとても瀟洒な明るい建物だ。舊館で相當の鍛錬を積んだ人が、この新館のはうにつぎつぎと移されて來る事になつてゐるのだ。けれども僕は、元氣がよいので特別に、はじめから新館にいれられた。僕の部屋は、道場の表玄關から入つてすぐ右手の「櫻の間」だ。「新緑の間」だの「白鳥の間」だの「向日葵の間」だの、へんに恥づかしいくらゐ綺麗な名前がそれぞれの病室に附せられてあるのだ。

「櫻の間」は十疊間くらゐの、さうしてやや長方形の洋室である。木製の頑丈なベッドが南枕で四つ並んでゐて、僕のベッドは部屋の一番奥にあつて、枕元の大きい硝子窓の下には、十坪くらゐの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.